

チェコ語の児童書選書にかかわる調査報告書

2016 年 3 月

報告者：チェコ語翻訳家

木村 有子

はじめに

ヨーロッパの中央に位置する現在のチェコ共和国は、複雑な歴史を歩んできました。第一次世界大戦後、オーストリア＝ハンガリー帝国から独立し、1918 年にチェコスロヴァキア共和国が成立します。しかし、自由と繁栄は 20 年しか続きませんでした。1938 年のミュンヘン協定によりチェコはドイツの保護領になります。1945 年に終戦を迎えたものの、1948 年に共産党政権が樹立すると、ソ連の東側陣営に組み込まれ、長い不自由な時代を強いられます。民主化運動の高まりにより、1989 年にビロード革命が起こり、共産党政権は崩壊します。民主的な政権が誕生し、再び自由を手に入れました。しかし、スロヴァキアと 1993 年に平和裏に分離することになります。

現在、チェコ共和国の人口は 1000 万人余りです。首都プラハの歴史地区は世界遺産に指定され、建築博物館のように様々な時代の建築を今に残しています。音楽、人形劇やアニメーション、絵本など、小さい国ながらチェコは独自の豊かな文化を育んできました。

チェコの子どもの本の世界では、エルベンとニェムツォヴァーの昔話集、国民的画家のヨゼフ・ラダのお話、カレル・チャペックとヨゼフ・チャペック兄弟の絵本とお話、人形アニメーションの巨匠トゥルンカが挿絵を描いた絵本が、時代を超えて今でもチェコ人に愛されています。

1. 国際子ども図書館の所蔵資料の評価、所見

国際子ども図書館では、平成 20 年 1 月 26 日から 9 月 7 日まで「チェコへの扉ー子どもの本の世界ー」というチェコの児童書の展示会が開催されました。その際展示の基礎となったのは、「20 世紀前半の昔話や創作童話を中心とした 218 点と 20 世紀後半を中心とする千野栄一（下記参照）氏旧蔵資料 623 点を合わせた約 850 点」のチェコ語児童書コレクションです。この展示会で使用されたコレクションを中心に作られた図録があり、作成にあたっては村上健太氏（児童文学研究者、駐日チェコ共和国大使館翻訳官）が監修をされました。現在日本語で読める、チェコ児童文学史の概観がわかる資料といえば、第一にこの図録が挙げられるでしょう。

『チェコへの扉 : 子どもの本の世界 : 国立国会図書館国際子ども図書館展示会』

2008.1（当館請求記号 KP266-J1）

本のコレクターでもあった千野栄一氏所蔵と思われる、20 世紀後半の児童書は、当時の話題作など個性的な本がそろっています。特に多かったのが 1988 年に出版された本です。さらに、展示会開催から 8 年の間にも、チェコの児童書の所蔵が新たに追加されており、国際子ども図書館が所蔵する、チェコスロヴァキア時代を含めたチェコの児童書は、平成 28 年 2 月 9 日現在で 1,235 冊あります。

チェコの児童書コレクション

<http://www.kodomo.go.jp/search/collection/other02.html>

展示資料リスト

<http://www.kodomo.go.jp/search/collection/pdf/czech-list4.pdf>

2. リスト作成時に留意した点

今回、国際子ども図書館のコレクションに加えるべき本を探すために、チェコにおける児童文学賞の受賞作、およびノミネート作品を調査しました。チェコの作家、作品のデータや書評がしっかりしている信頼できるウェブサイト Čítárny も参照しました。

さらに、私が所蔵しているチェコスロヴァキア時代から現在のチェコ共和国に至るまでの本の中で、チェコの子どもの間で広く読み継がれているものや、日本語に翻訳出版されているものの国際子ども図書館に原書がないもののほか、推薦したい昔話集や挿絵の優れた絵本を選書用ブックリストに加えていきました。

その中から 2 冊ほど紹介します。チェコの民話を収集、再話をした Karel Jaromír Erben（カレル・ヤロミール・エルベン）の『Zlatovláska a jiné české pohádky』は、13 の昔話に、Artuš Scheiner（アルトウシ・シャイネル）が繊細な挿絵を描いた美しい本です。これは『金色の髪のお姫さま チェコの昔話集』の原書ですが、日本語版は原書よりも版が小さくなっています。同じく Karel Jaromír Erben が書いた昔話や詩など 64 編が収められた『Pohádková kytice』（昔話の花束）は 389 ページという厚い本ですが、Antonín Strnadel（アントニーン・ストウルナデル）の斬新な挿絵と装幀が魅力的です。チェコ人は、同じ昔話を題材にしても、各時代で創意工夫をこらしていることが、これらの本を比較するとわかります。

3. チェコの児童文学賞

チェコの児童文学賞として有名なものに、「Zlatá stuha」（金のリボン賞）、「Magnesia Litera」（マグネシア・リテア賞）の 2 つがあります。

金のリボン賞は 20 年以上の歴史を持ち、長い間、チェコ共和国においてもっばら子どもの文学に与えられる唯一の賞でした。チェコ語によって書かれた優れた子どもの本部門、ヤングアダルト部門、芸術部門などに分かれ、1 年にいちど贈られます。金のリボン賞は、専門家が丁寧に審査し、子どもの本の品質を保証するものとして、海外からも高い評価を受けています。受賞作品のイラスト巡回展や、受賞作家による芸術工房、グループでの朗読といったイベントを通して、読者のリテラシーの成長を助け、子どもの本や文化活動への関係を深めています。賞を発表するのは、IBBY チェコ支部の「子どもが本に親しむ協会」ですが、他にも「子どもの本のイラストクラブ」「翻訳コミュニティ」「国立教育博物館」「J.A コメンスキー図書館」「国民文学メモリアム」といった団体が共同して運営に携わっています。2014 年は Daniela Fischerová 作、Jitka Petrová 絵の『Pohoršovna』（お仕置き部屋）が受賞しました。

マグネシア・リテア賞は 2002 年に始まりましたが、当初は大人向けの本の賞でした。2007 年より子どもとヤングアダルト賞が新たに創設されました。初の受賞者は Iva Procházková（イヴァ・プロハースコヴァー）の『Myši patří do nebe』（天国のネズミ 当館請求記号 Y8-B8119）でした。2013 年には Pavel Čech 作の『Velké dobrodružství Pepíka Střechy』（ペピーク・ストゥシェハの大冒険）が受賞しました。

また、「Nejlepší knihy dětem」（最も素晴らしい子どものための本）というカタログを作るプロジェクトがあります。SCKN「チェコの書店と出版社組合」と IBBY チェコ部門が、チェコの子どもとヤングアダルトの新刊から、金のリボン賞の受賞作品など優れた本を毎年 35 冊選びます。出版社の連絡先や、受賞作品の情報も掲載しています。カタログは書店員や図書館、学校、子どものいる家庭など、多くの人に本を普及するのが目的で作られています。当初は電子版しかありませんでしたが、現在では印刷版もあります。ヨーロッパの主だった国では、このようなカタログが見受けられ、本や子どもと関わる人の手助けになっています。

4. チェコの民話、伝承

口承文芸への関心が高まった 19 世紀半ば、ドイツ、北欧、イギリス、またロシアなどの国において民謡や民話の収集が盛んになり、1812 年にドイツで、グリム兄弟による『グリム童話』が出版されました。

Karel Jaromír Erben（カレル・ヤロミール・エルベン 1811 年～1870 年）は、チェコ語や他のスラヴ民族の民話や伝説を収集、再話しました。民謡も多く収集し、民謡に着想を得

て書いた 13 編のバラードからなる詩集『Kytice』（花束、1853 年）は、チェコの古典として読み継がれています。民謡と詩は後に『Prostonárodní české písně a říkadla』（チェコ民衆の歌と詩、1864 年）として出版されます。昔話は『České pohádky K. J. Erbena』（エルベンのチェコの昔話）、『Zlatovláska a jiné české pohádky』（『金色の髪のお姫さま チェコの昔話集』）などが出版されています。

エルベンと、ほぼ同時代に生きた作家の Božena Němcová（ボジェナ・ニェムツォヴァー 1820 年～1862 年）も、Karel Havlíček Borovský（カレル・ハヴリーチェク・ボロフスキー）や J. K. Tyl（ティル）と、エルベンと共に 1840～1850 年代にはチェコ文学の最前線にいました。彼らは多くの昔話を収集、再話し、後世に残しました。ニェムツォヴァーの子どもの頃の思い出をもとに書かれた『Babička』（おばあさん）は、チェコの国民文学となり、映画化もされました。

エルベンとニェムツォヴァー、ふたりの作家の昔話には、Josef Lada（ヨゼフ・ラダ）など時代により様々な画家が挿絵を描き、アニメーションや映画「Otesánek」（オテサーネク）（エルベン）、Pišná princezna 「いばったお姫さま」（ニェムツォヴァー）にもなっています。

ほかにも、今回のリストに挙げた作品には、Božena Němcová（ボジェナ・ニェムツォヴァー）作、Artuš Scheiner（アルトウシ・シャイネル）絵『Velká kniha pohádek』（大きな昔話集）、Miloš V. Kratochvíl（ミロシュ・クラトフヴィール）と Milada Malešová（ミラダ・マレショヴァー）による『Báje a pověsti z Čech』（チェコの神話と伝説）、Jiří Horák（イジー・ホラーク）と Josef Lada（ヨゼフ・ラダ）による『Český Honza Lidové pohádky』（チェコのホンザ - 民話）などがあります。

5. チェコの出版事情

多くのチェコ人が言うように、約 20 年単位で社会体制が激変してきたチェコでは、出版の形態も時代により影響を受けてきました。

1948 年に共産党が政権を取り、ソ連型の社会主義が導入され、チェコスロヴァキアは東ブロックに組み込まれます。企業の国有化が進み、子どもの本の出版についても国有（国営）企業が担い、個人の出版社はなくなりました。1949 年から 1969 年までの間、国営児童書出版社である SNDK（Státní nakladatelství dětské knihy）、後の Albatros 社（1974 年～現在）が、ほぼ独占的に児童書の出版を行うことになりました。同社はプロパガンダと情報を子どもに手渡す使命を担っていました。初期は、ソ連の翻訳本が多く、ストーリーもソ連を礼賛する本や、リアリズム文学が多かったのですが、次第に多様なチェコの子ども本が出版されるようになっていきます。

社会主義時代の特徴として、昔話や人気がある作家の本の出版部数の多さが目を引きま
す。ひとつの例ですが、1985 年に Albatros 社から出版された『Velká kniha pohádek』（大
きな昔話集）ニェムツォヴァー作, Artuš Scheiner（アルトウシ・シャイネル）絵、の出版
部数は 150,000 部です。

1960 年代後半の「プラハの春」と呼ばれたる民主化運動の高まりで、表現の自由度が増
し、絵本にも開放的で実験的な内容のものが見受けられるようになります。しかし、1968 年
の民主化運動「プラハの春」の挫折後は少なくなります。

かつて Albatros 社に長年勤務していた知人より、興味深い話を聞きました。当時、ある
画家の絵が当局ににらまれ、検閲のために絵を描くことができなくなった時、編集者が画家
に声をかけて、絵本の挿絵を描いてもらったそうです。その結果、絵画のような素晴らしい
挿絵が絵本に使われたことがありました。当時の絵本を、そのような視点で見れば、挿絵に
隠された秘密を見つけることができるかもしれません。

1989 年、民主化運動のビロード革命により共産党政権は崩壊し、民主化されたチェコで
は雨後の竹の子のように大小の出版社が現れました。アメリカ文化の象徴のようなディズ
ニーの絵本が平積みで売られ、一時は、これまでのチェコの絵本は時代遅れの絵本のように
思われがちでした。抑圧されていた自由への渴望が、絵本、出版の世界でも一気に噴出した
時期でした。そのあと、出版社は徐々に淘汰され現在に至ります。現在、新進のイラストレ
ーターや作家を起用し、アヴァンギャルドな絵本作りをしている出版社 Baobab や、ユニ
ークな本を出す Meander 社など、既存の枠にとらわれない本作りをする出版社は、注目に値し
ます。

6. 数字で見るチェコの最近の出版状況

2014 年にチェコ共和国で出版された書籍点数は、合計 16,850 点。そのうち、翻訳書の割
合は、34,6 %、翻訳書の中の英語の割合は 52,6 %でした。

2014 年にチェコ国内で出版された子どもの本は約 1700 点で、全出版物の 10 パーセント
を占めています（2012 年は 9.8 パーセント、2013 年は 9.38 パーセント）。義務教育（9 年
制）の生徒のための教科書の割合は全体の 2.8 パーセント、大学生のための教科書が 6.5 パ
ーセントを占めています。

長期間の傾向を見ると、子ども向けの本の出版点数は増加しています。そこから教科書や
ヤングアダルト小説を除いた子どもの本の傾向だけ見れば、10 年で倍増しています。一方、
大学の教科書の出版点数は激減しています。

Svaz českých knihkupců a nakladatelů（チェコの書店と出版社同盟）
Český knižní trh（チェコの図書市場）

<http://www.sckn.cz/index.php?p=ckt>

7. チェコにおける、絵本とアニメーションの関係

ロングセラーの絵本に見受けられる特徴は、テレビの番組「Večerníček」（ヴェチェルニーチェク）との密接な関係です。

ヴェチェルニーチェクとは、チェコスロヴァキア社会主義共和国時代から毎晩放送されていた、15 分程度の短い番組です。当時、テレビの娯楽番組は極端に少なかったため、ほぼ全国の子どもが欠かさず毎晩ヴェチェルニーチェクを見ていました。戦闘物のアニメーションとは違う、子どもがいい眠りにつけるような、素朴で心温まるお話です。子ども達に人気があったアニメーションは、本になることが多く、逆に絵本として人気があったものは、アニメーション化されて、テレビで放送されました。

2015 年、ヴェチェルニーチェク 50 周年を記念してナショナルギャラリーで展覧会が開催されました。

Česká televize (チェコテレビ)

<http://decko.ceskatelevize.cz/vecernicek#hvezdy>

Národní galerie (ナショナルギャラリー)

<http://ngprague.cz/exposition-detail/vecernicek-slavi-50-let/>

8. 子どもの本をめぐる環境

チェコの人々にとって、一年で一番大事な行事といえばクリスマスです。クリスマスイブの日に、ツリーの下にいくつも用意されたプレゼントの中には本が入っていることも多い、とチェコの友人に聞きました。「他のどんなプレゼントよりも、本が一番嬉しかったし、本をもらったその日のうちに夜更かしして全部読んだ」というエピソードもありました。古本を開くと、“贈り主から誰々ちゃんへ”というメッセージが書かれていることがあり、本を贈る習慣があることを伺い知ることができます。

チェコではしつけが厳しく、子どもは親よりも先にきちんと自分のベッドで寝なくてはならない家庭が多いのですが、子どもはお話をせがみます。今でも、子どもの枕元で、絵本や昔話を読み聞かせる光景は見られます。チェコの国民的画家、作家のヨゼフ・ラダのエピソードですが、『Mikeš』（『黒ねこミケシュのぼうけん』）は、娘たちに毎晩お話をせがまれているうちに、あの長いお話ができた、と回想しています。

また、プラハの街角には古本屋が多いことも、チェコ人の本好きを裏付けているかもしれ

ません。時代がどんなに移り変わっても、古本屋に一步踏み入れれば、雰囲気は昔のままです。

（参考）チェコの児童文学団体、児童文学ウェブサイト

IBBY Czech Republic（チェコ国際児童図書評議会）

<http://www.ibby.cz/>

Zlatá stuha（金のリボン賞）

<http://www.zlatastuha.cz/>

Magnesia litera（マグネシア・リテラ賞）

<http://www.magnesia-litera.cz/>

Nejlepší knihy dětem（最も素晴らしい子どもの本）

http://www.ibby.org/fileadmin/user_upload/katalog-knihy-detem-2014.pdf

Čítárny（児童文学の書評サイト）

<http://www.citarny.cz/>

Ilustrátoři a dětské knihy（上記URL内 イラストレーターと子どもの本）

<http://www.citarny.cz/index.php/knihy-lide/autori-a-knihy/ilustratori-a-detske-knihy>

Svaz českých knihkupců a nakladatelů（チェコの書店と出版社同盟）

<http://www.sckn.cz/>

Český knižní trh（上記URL内 チェコの図書市場）

<http://www.sckn.cz/index.php?p=ckt>